

貴重な発見の数々に、下北のルーツを垣間見る

11月7日(土)、「下北の石器時代」と題し、当村尻労地区の「尻労安部洞窟」の発掘調査成果を中心に、下北半島の埋蔵文化財が持つ考古学的な重要性を報告する公開シンポジウムが開催されました。

尻労安部洞窟は、慶應義塾大学が中心となり2001年から発掘調査が続けられています。これまで縄文時代の人骨や土器・骨角器のほか、旧石器時代の地層からは動物骨と石器が同時に発掘されています。

実は、火山の多い日本の土壌は酸性になってしまうため、骨の保存が困難で、国内で旧石器時代の動物骨と石器が同じ場所から見つかる例は極めて少ないのが現状です。一方、石灰岩で形成された尻労安部洞窟は土壌がアルカリ性となり、骨の保存状態が良好です。それゆえに、石器と動物骨が同時に発見され、旧石器時代の狩猟採集活動を考える国内有数の貴重な遺跡として注目を集めています。

報告会では、これまで発掘や遺物の調査に携わってきた各分野の専門家の皆さんが壇上に立ちました。

調査結果の中でも特筆すべきは、旧石器とともに見つかった動物骨の種類なのだそうです。洞窟内からは、石器と同じ地層からウサギなどの小型動物の骨も多く発見されていて、これは、当時の旧石器人が小型動物を狩猟の対象にしていたと考え得る結果だそうです。

小型動物を狩っていた…という当たり前のように聞こえるかもしれませんが、私たちの持つ“旧石器人のイメージ”は、石槍を手に、巨大なマンモスや大きな角を持つヘラジカに立ち向かう姿ではないでしょうか？このイメージは、教科書に描かれている一般的なイメージです。しかし、尻労安部洞窟から小型動物の骨が見つかったことで、当時の狩猟や食糧の定説が覆される可能性が出てきたということでした。尻労安部洞窟の調査結果は、日本の教科書を変えかねないほどの発見なのだそうです。

また、同遺跡から発掘された縄文人骨は一部のDNA解析が行われ、現代の日本人にはほぼ見られないDNA型の人種であったことがわかっています。この人骨は保存状態が非常に良かったため、現在、遺伝子DNAの全解析が進められており、縄文人の遺伝子データの指標になるのが確認されているとのことでした。このほか、見つかった石器には国内には例のない材質の石が使われているものがあり、その候補地は遠くロシアの地ではないか…とも考えられるそうです。興味深いのは、前述のDNA型も、現代ではロシアの一部地域に特徴的なものであるということ。東通村に住む私たちのルーツを探る上でも、尻労安部洞窟はドラマティックな場所になるかもしれません。

※2日目の現地見学の様子は「さんぼみち」でもお伝えします。

一歩を踏み出し、海外で学ぶ意義

10月30日、東通小・中学生や村民の方を対象とした研修会が開催され、東通中学生による今年度のニュージーランド海外研修(詳細は広報10月号掲載)の報告や、青年海外協力隊などで海外の教育に携わった鎌田幸子教諭(東通中学校・写真下)による講演が行われました。

中学生の報告では、実際の研修風景を映像で紹介しながら、見事な英語力で10日間の思い出やこれからの自身の目指す姿を発表しました。

鎌田先生の講演では、実際に足を運んでわかった他国の治安や貧困問題、人々の暮らしや教育環境についても触れ、「夢をかなえる方法」や、海外経験で得た価値観などをお話しになりました。

研修会には児童・生徒・一般あわせて約400人が参加し、貴重な体験や海外生活の話に耳を傾けました。

